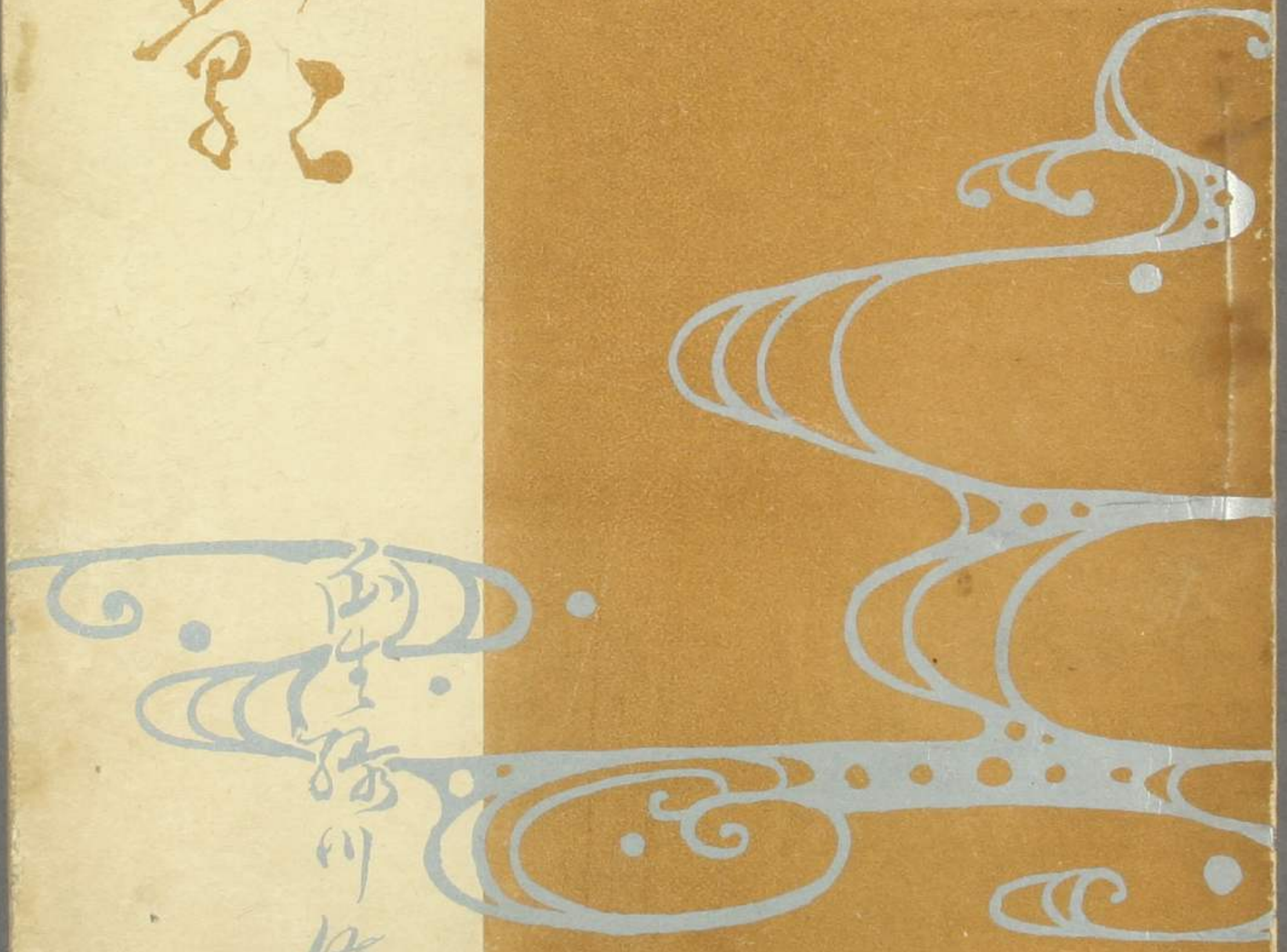


增
見
記

西
生
橋
川
地



5

10

15

20

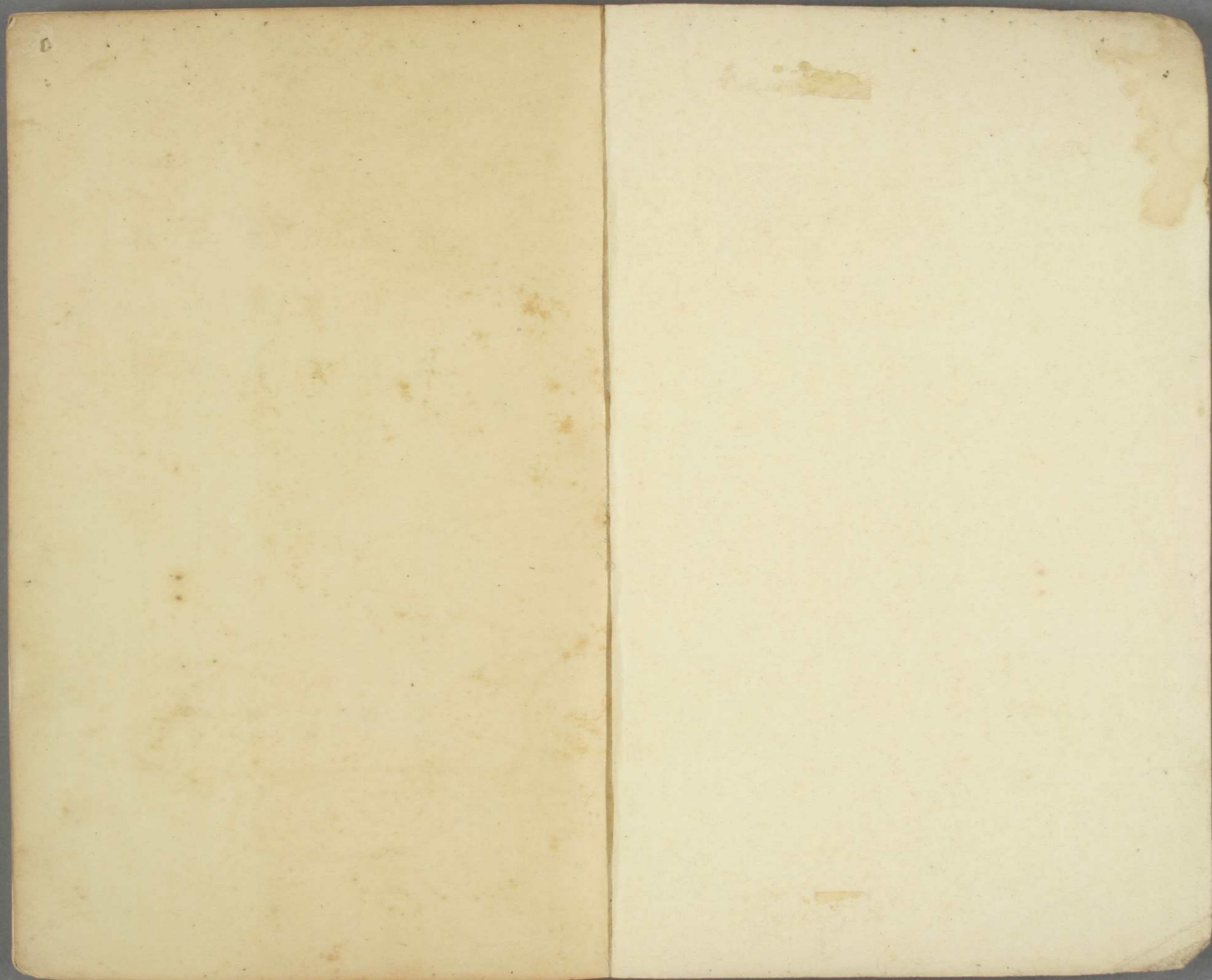
新
林
影



山
主
緑
川
著







羅衣纏ふ

瓔珞の

玉の黄金は

送りて

山吹の瀬に

裾裳捌く

誰をしも待つ

〔三〕

月の三室戸

姫佇立て

瀧津山瀬の

露水沫

濡れざらましこ

白銀しろがねを

膝かひる淡月あわつき

灰ほめきは

御手みてに翳かざしの

輪暈かむりがさ

何處いづこ訪をづる

〔三〕

あ、日ひの姫ひめが

今日けふをしも

憧あこがれ暮くし

宵月よひづきの

姫待ひめまちつ姫ひめが

談合かたらひを

聽きくは此この山やま

私語さしごは

其その川かわ波なみの

瀬せに騒さわぐ

葦間あしま吹ふく風かぜ

〔四〕

疇昔むかしを現いま在まに

偲しのぶ草ぐさ

山やまの靈魂こたまが

教唆そしに

心狂こころぐるひの

水魄神すだまがみ

魔風誘惑まかせをびきぬ

篠亂しのみだす

猜疑そねみの雨あめや

頽なだれ雲ぐも

文あやなき真ま闇やみ

〔五〕

濁にごりの水みづに

邪崇よのけの

叫喚さけびの唸うめき

漲みなぎりて

滔こぼ々ろの響びんき

浮船うきふねの

島根しまね崩くづれて

聳立そはだちの

影かげもあらしな

塔礎いたづらは

一ひと夜よに失うせて

〔六〕

山やまの魔神まがみは

嘲笑あざわらりぬ

此河このかわ限か割ぎる

鳥獸とりけもの

影かげだに留とどめじ

川の魔は

打微笑ぬ

魚鱗の

敷を塌さめ

あさましこ

聖僧は泣きぬ

〔七〕

『喃月姫よ

繰溜めし

吳織の糸の

百條を

練りて凍れる

白銀しろかねに

彫きざみて築きつけ

塔頂いただきを

紫雲むらさきぐもに

礎いしづゑを

疊ため川波かわなみ』

〔八〕

『さらば日ひの姫ひめ』

投なげ懸かる

綾織あやの糸いとの

八千條やちせんじょうに

山やまいましめよ

此川の

魄も諭せよ

永久に

静けく靖く

授かれの

『美妙き鎮』

〔九〕

奇しき山靈を

慰籍の

靄の羅布

秋寂びて

纏ひけらしな

唐衣からきぬを

色いろめきつ點綴づる

花葛はなかげら

撓たわみの小枝こえだ

葉傳はづたひの

露つゆの戦たたかぎ

[10]

妙たえなる水魄すいぼく

囁ささやきて

秘ひむる心こころの

歡喜よろこびを

狹霧ささぎりに罩こめし

綾帳あやこほり

ひきぞ隔へだての

さざれ波なみ

翼つばさを洗あらふ

翡翠かろせみの

呼よび交こふ聲こゑ

〔一〕

姫ひめや桿さほさす

浮うかみ洲すの

烟けむる尾を花はなに

招まねかれて

舟ふな路ぢに仰あふぐ

瑠璃るりの空そら

雲叢くもむらだちの

天矛あまほこは

聖世みよを鎮しづめて

秋津洲あきつすの

國くにの守護まも

〔一二〕

宇治うぢの川霧がらぎり

むら消きて

十層じゆ三重みへの

玉たまの塔た

正ただかに竣功なげぬ

礎柱いしはしら

苔ぞ蒸すめりこひむ

幾世しもいくよ

湛ゆる水はたみ

紺青のこんせい

曇らぬ鏡くもかぐらみ

〔一三〕

緑紅みどりくれない

紫のむらさき

虹霓の浮橋にじうきはし

靉翳てあひかげ

七夕姫がたなはたひめが

雪ゆきに織をり

雨あめに晒さらしの

五い百ほ機はたを

風かぜに捌さばきて

打うち掛かる

明ほ星しの寶み冠かぶり

〔一四〕

玉たまの芙ふ蓉よぶに

黛まゆげの

匂におひ零こぼれて

黒くろ髪かみの

髻もみぢり亂みだす

天津風あまつかぜ

霞の裾裳かすみもも

陽炎かげろうの

袖そでもかへ振りて

樂がくの音ねは

御手みてより漏もるゝ

〔一五〕

撥音はち激をきし

宇治うぢの川かわ

小絃いこぞ私さ語めく

淀よこの波なみ

早瀬はやせ小車こぐるま

伴つれて廻まふ

水み源かみ遠とこし

鶯うぐいすの

竹たけ生をふ島しまや

四よの緒をの

琵琶びわの湖みづうみ

〔一六〕

虚そ空らに在をせる

七な姫ひめが

寶たから藏くら開ひらきて

赫か耀やきの

月つきの桂かつらの

花簪はな かざし

星を連ねしほしをつら

楷梯をきさ はし

龍の宮居にたつみやい

訪問のたむがへ

深き誓ふかちかひ

〔一七〕

千々の法燈ちのびのあかし

萬燈にまんとう

水は碎きてみづはくだ

不知火のしらぬひ

散ては集ひちりあは

淀みては

𠄎を畫く

此淵に

龍こそ潜め

夜を光す

珠をや秘めて

〔一八〕

鱗眞白き

蛇の

狂ふ玉簾

揺らく波

流は早し

柴舟しばねの

水みづのまにく

百八ひゃくやつの

川瀬かわせの螢ほたる

むら立ちたちて

夜よは燃もるかも

〔一九〕

萬み靈たまは宿やどる

三み千ち基もとの

塔婆とつぱの小舟せうねは

法のりの海うみ

葦あしの葉は隠かくれ

漕こぎ行ゆけば

ほのく見みゆる

彼かの岸きしに

彌い咲さき亂みだる

曼てん珠が沙いの

華はなの臺うたな

[110]

下した枝えの露つゆは

念じゆ珠すつゝる

濕しめりの地つちの

苔こけ衣ころも

濡ぬれ葉は萍うきくさ

定めなき

明日をも待たじ

束の間

風の戦ぎも

蟲の音も

法の御聲

〔三二〕

姫が嘆ちし

山ながら

岩間樹梢に

群鳥の

空に懸れる

狩人の

絞る真弓や

新月の

矢かげ怖れじ

放生の

翼は安し

〔三三〕

姫悲みし

川なれご

色も澄めり

此淵に

影さす月は

漁人すなびとが

糸いとにも擬まこふ

鈎つりはりに

鰭ひれも動うごかじ

魚鱗うろこの

憩いどひの藻草もぐさ

〔三三三〕

あ、姫ひめ在まさず

常世とこよしも

名残なごりの衣きぬを

秋あき染そめて

樂がくの音ね残のこる

四の緒をの

瀬々の調曲は

絶る間も

嵐ならえじ

歡喜の

寶塔聲あり

契り草

誰なれこ情なさけを

契り草ぐさ

他あたしの色香いろか

なくもがな

黄金こがねの花はなの

儂^{はか}なき夢^{ゆめ}を
 手^て枕^{まくら}に、
 袖^{そで}かた敷^{しき}の
 假^{かり}衾^{ふすま}、
 鐘^{かね}に怨^{うらみ}嗟^{なげ}の
 數^{かず}々^{かず}も、

下^{した}露^{つゆ}に、
 濡^ぬれこそすめり
 誰^たが裾^{すそ}、
 眞^ま白^{しろ}き花^{はな}の
 移^{うつり}香^かを、
 包^つみやすなる
 誰^たが袖^{そで}に。

多おほき人ひと目めに

つゝましの、

囁ささめく君きみが

忍しのび音ねを、

中なかに隔へだての

花はな籬まがき

戀こひの狭さ衣ころも

浪なみ華わ褙づま

『を、それよ君きみ』

此この花はなに

優やさしの姿すがた

偲しのぶかも』

『を、それよ君きみ』

言ことの葉はの

情なさけの露つゆは

小枝さへだにも

清きよき雫しづくこ

宿やどるかも』

秋あきの八千種やちせんぐさ

ごりわきて、

床ゆかしの主ぬしの

名頭ながしらは、

を、此この花はなぞ

『菊きくの君きみ』

慕したふ此この身みは

美うつくしの、

花はな辨びらにさる

接くち吻づけの、

許ゆるしを得あたる

露つゆ子こ姫ひめ。

雪ゆきの腕かひなの

玉たま禪だん、

しほり手た折をりし

菊きくの枝えに、

縁えん結むすびの

花はな環たまき、

露つゆが情なさけの

花はな筐がたみ

燃もゆる唇くちびる

觸ふれよ君きみ

解ほきな捨すてそ

契ちぎり草ぐさ

苔こけの衣ころもの

山やま清しみず水みづ

溪い間まを潜くぐる

いさゝ川がわ

流ながれの末すえは

夫それよ君きみ

戀こひしき門邊かどを

過よるなる、

羨うらやむ水みづの

通路かよひに、

いざ託こころてん

花環はなたまき。

うら耻はづかしく

咲さく花はなに、

目めをだも觸ふれそ

他たし人びと、

戀こひしき主ぬしの

御手みてにこそ、

すくるよ濡れし

契草、

環の花の

香に迷ひ、

飛な狂ひそ

浮かれ蝶。

花を誘ひの

水ならで、

手づから流す

白菊の、

花の筏の

行衛こそ、

やがては床し

彼の君の、

接吻をこそ

憧るれ、

あゝかひなしや

浮かれ蝶。

萍ならぬ

花の香の、

波のうねく

濡れて咲く、

慕ひて焦れ

舞ふて戀ふ、

仇^{あだ}し心^{こころ}の

甲斐^{かひ}もなき、

花^{はな}には主^{ぬし}の

あるものを、

飛^{とび}な迷^{まよ}ひそ

孤^{はな}れ蝶^{てふ}。

色^{いろ}をもこむれ

移^{うつり}香^かの、

花^{はな}に主^{ぬし}あり

流^{なが}れには、

只^{ただ}託^{たく}て、

浮^うくからに、

瀬せにな散ちぢしそ

花はな辨びらを、

渦うずにな解ときそ

花はな環たまき

誘さそ惑わで流ながせ

一ひとつ蝶てふ。

蝶てふよ儂はかなき

浮うかれ蝶てふ、

主ぬしある花はなを

慕したひても、

行ゆ方は遠とほし

山やま瀬せ水みづ、

罩こむる狭霧さぎりや

山風やまかぜは、

花はなを隔へだて、

濡ぬれ翼つばさ、

蝶てふご契ちぎりの

花はなならじ。

露つゆご縁えにしを

契ちぎり草ぐさ、

心こころは花はなに

身みは茲こゝに、

あるは現世うつよ

幻まぼろしの、

妙なる御聲
 憧がれの、
 花は床しき
 君が手に、
 戀しき呼吸の
 通ひなば、

やがて見みゑん
 戀し君、
 姫が流せし
 花の環こ、
 知ろして情
 酌めよ君。

假寝かりねに亂みだる
 黒髮くろかみは、
 手枕たまくらかせし
 仇夢あだゆめを、
 肌はだに纏まとひの
 色衣いろころも

蘇生まみがへらまじ
 我魄わがたまは、
 脱ぬけて出いらむ
 我影わがかげは、
 朧おぼろに立たちて
 君きみが傍へに。

艶なまめく紅べにの

血ちは燃もるて、

花はなに滾こぼるゝ

露つゆの香かの、

『を、床ゆかし君きみ』

戀こひし君きみ』

誰たれヶ袖そで橋はし

(一)

偲しのぶ誰たれが袖そで

朽くち木き橋はし

磯いその筈はず家やに

通かよひ路ぢの

柚人そまや狩人かりびと

山幸やまきちの

袖無衣そでなしころも

誰綴たれつづる

(三)

逢初あひそめの川かわ

鶺鴒かさぎの

翼つばさに越こしぬ

草くさの庵いほ

訪問なごつる海女あまは

脛曝はざす

塩垂衣しほたれころも

誰たれか乾ほす

三

袖翳す主そでかげすぬし

柚人や知るゆずまやしる

蘆の浦風あしのうらかぜ

招かれのまねかれの

藻塩焚く屋のもしほたたくやの

村烟りむらけむり

倂白みあはらけしら

月朧つきおぼろ

四

逢初の人あひそめのひと

海女も知るあまもしる

尾花細路おなほそぢ

橋はしの畔たもとの
 花はな茨いばら
 縋すがりて綴つづる
 碑いしは
 猜そねの雨あめに
 朽くちじもの
 嫉ねたみの風かぜも

夕ゆふ映ばの
 穂ほにも出いめり
 醒さめて憂うれき
 秋あきの胡こ蝶てふの
 夢ゆめ淡あわき

(五)

消さじもの

〔六〕

その村時雨

吳織

山の彩糸

染めて織る

人は知らじな

我袖は

露そぼ濡れて

緋は褪せぬ

〔七〕

翻すは嵐

綾あやの裾すそ

九つ十九じゅう折をり徑みち

露つゆ繁しげき

戀こひの小さ衣ころも

肌はだ破やぶて

いらつ男をとこの

艶つや色いろ失うせぬ

(八)

儂はぶなき逢あふ瀬せ

悔くやめごも

思おもひは絶たゑじ

誘さそふごも

誘さそはるゝごも

情なさけの言葉ことばは
 忘わすれ得あぬ
 嬉うれしき風かぜよ
 彼かの人ひとご
 袂たもともつれし
 橋はしの上うへ

浮草うきくさの
 窠やうれ纏ちれて
 花はなの咲さく

(九)

君きみご逢あひ初はじ
 語かたりてし

《10》

馴れし肌衣な だ きぬ

牡丹花ふ だ ん げ

火は紅ひ くれなゐに

我胸わが ちゆうは

燃ゆるらん思もひ

彼の人かの ひとの

身みをも焼やまし

手てな觸ふれそ

《11》

焼やけよ迎むかこそ

捉とられの

肌は膚だにも觸さるめ

逢初あひはつの

崖きしに繁しげりの

藻も隠かくれに

幾世いくよ添そまし

九十九つくちゅう髪がみ

(二三)

相互かたみに忍しのぶ

蘆あしかけの

他あたに見みる目めの

かひなさに

袖そでのみ觸ふれよ

我肌わがはだは

人ひとに許ゆるさじ

重^{かさね}褻^{づま}

(一三)

夫^{つま}と約^{さだめ}婚^めの

仇^{あだし}男^をに

添^{そひ}臥^ぶす肌^{はだ}の

血^ちは冷^ひゑて

骸^{せき}を脱^ぬけし

魂^{たま}はそれ

床^{ゆか}しの君^{きみ}の

袖^{そで}にこそ

(一四)

心^{こころ}ならずも

木傳こづたひの

纏ちぢれは解とけぬ

姫ひめ蔦づたの

柚そ人ま撃うつ斧をに

帶おび斷きれて

戀こひに窶づつれし

濡ぬれ衣ころも

(一五)

許ゆるさじ添そはじ

我わが肌はだも

甲か斐ひぞなからめ

現うつ世よに

二ふた途みちかけし

夫つまご夫つま

重かさね重かさねし

色いろ小こ袖そで

(一六)

許ゆるさじ心こころ

夫つまや知しる

添そわじ肌はだを

君きみや見みじ

怨うらまる、身みの

よしなさを

愚をくも悔くむ

川かわの名なに

(一七)

思をひは二ふたつ

うたかたの

身みを捨すててこそ

を、夫それよ

浮うむ瀨せもあれ

醜し骸くろ

彼かの君きみの胸むね

火ひは消きるむ

(一八)

浮う名な立たつ波なみ

厭いとまじ

身みは汚けれじな

心澄む

逢初の君

進らせむ

筐の鼓

我ご見よ

(一九)

狂ひそよごて

我捨てき

亡き君怨む

今何處

御姿在す

逢初の

名の戀しさに

水狂ふ

(110)

移香残る

誰が袖こ

問はじな獨り

手枕の

増穂の薄

寝亂れて

涕俛ぶ

かほよごり

(111)

君私語か

桔梗ききょうの調紐しらべ

紫むらさきの

打うたふよ鼓つづみ

片かた敷しきて

秋あきの七草ななくさ



風かぜ戦たたかく

汝なれが涙なみだの

時し雨ぐれ降ふる

蘆あし村むら分わけて

御み姿すがたの

葉は隠かくれ衣ころも

露つゆの袖そで

雫しづく眞ま萩はぎに
 散ちり残のこる
 筐かたみに悲かなし
 撫なで子しこの
 色いろや情なさけの
 緋ひの紙かみ紗さ

裏うら表を皮もて
 黄こ金がねを盛もりし
 女をひ郎な花めし
 白しろ銀かねの
 下しつ枝ゑたわゝに



(二四)

誘さそひの曲調しらべ

淵ふちに瀨せに

狹さ霧ぎりの帳とばり

かゝげ來きて

八重やゑの葎むらの

草影くさかげに

君きみ在ます音をこか
きりはたり

(二五)

音ねに幻まぼろしの

佛をらかけや

誰たれご見みるらむ

其人そのひとの

葛くわの葉衣はころも

藤袴ふじはかま

そよぐ尾花おなの

亂みだれ髪がみ

(二六)

水みづに舞まふ袖そで

浮草うきくさの

雫しずくは君きみが

涙なみだかも

身みは濡ぬれさぎの

羽ははやれて

狂くるひの姿すがた

葭束の間も

(二八)

聲許り

君松虫の

詫て泣く

情なき心

耻づかしき

(二七)

寄添るば

月隠れ

影底暗み

仇瀬波

戀こいの八や千ち種くさ
 秋あきの野の
 姿すがた幻まほろし
 狂くるひ舞まふ
 亂みだれの鼓つこみ

(二九)

懷なつかしの
 君きみ憧あこがるゝ
 秋あき更たけて
 蜉かげ蝻ろふ果はかな
 白しら露つゆの
 乾ひる間ま待またじな
 身みは消きゆる

瀬せには怨うらみの
 波なみ騒さわぐ
 誰たが袖そでの橋はし
 行ゆき逢あひの
 柚よ人まは謠うたひ
 海あ女まは舞まふ

身みに飾かぎる
 袂たもとに引ひかれ
 誘さそれて
 淀よどみの淵ぶちに
 逢あひ初そめの
 (三〇)

京女郎

(一)

夢路は淡し

仇し野の

花をや簪し

一夜妻

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 夢路, 仇, and 花.

京女郎

〔一〕

夢路は淡し、

仇し野の、

花をや簪し、

一夜妻。

引眉ひきまゆうるみ、

ほの白しろき、

夕邊ゆふべの芙蓉ふよう。

朝露あさつゆに、

頬紅ほをべに溶とけて、

艶照つやてりの、

野茨薔薇のいばらばら匂におふ、

唇くちびるの。

香かにこそ酔よはめ。

を、京女郎きょうにようらう。

(三)

風咽かぜひせび泣なく、

浅茅原あさちから。

垂帳さしはりに秘ひめし、

綾褥あやぶすま、

幻消まほろしきるぬ、

かげろふの、

儂はかなき燐ほり、

伽羅きやの香かも、

露つゆうら澗野かんのの、

花菱はなり、

浮うかれ男蝶をとの、

醜骸しひくろ。

算かこそ亂みだせ。

を、東男あづまを。

〔三〕

通の關路

忍ぶ草

草摺衣

裾破れぬ

手折え欲しき

衣手は

濡れぞえさらめ

戀草の

露に憧れ

寄り添ふば

靡き退きぬる

女郎花

風にや迂曲る

を、京女郎

〔四〕

秋^{あき}たけぬらし、移^{うつろ}ひの、花^{はな}羞^{はづ}耻^{かし}の、袖^{そで}翳^{かげ}す、儂^{あふ}な^なの^の姿^{すがた}、

なまなかに、

うつしな採^とりそ、野^のに棄^すて、ひく人^て煩^{わづ}らし、郎^{いらう}姫^{ひめ}、契^{ちぎり}捨^すつるも、怨^{うら}まじな。戀^{こひ}は憂^{うれ}きもの。

を、東男。

〔五〕

浮かむ瀬もなし、

濁りゑに、

虚偽多き、

醜花の、

水莖茂る。

『待つ間憂し、

今宵來せよ、

朗君、』

誘ひの流れ、

根無し草、

花はうきすの、

藻屑にも

縋りて咲くを

を、京女郎

〔六〕

ひきそよ袂

薄紙衣

我胸焦る

螢火の

千々に亂るれ

寝さめ髪

姿艶めく

菊襲衣

汝が情なきに

彌増いやはましの、

切せつなこころの心、

血ち潮しほ沸わく。

盡つきせぬ怨うらみ。

を、東あづま男をとこ。

〔七〕

執しやく念ねんは寄よる邊へ

片かた男をとこ波なみ、

濱はまの眞まこと砂すな地ぢ、

濡ぬれ褥ふすま、

妹いも脊せの貝がらの、

名なもあるに。

『情つねなき君きみよ、

他し男ご、

契りを籠むる、

戀衣の、

夫しあるか』ご

反問の。

心もそぐろ。

を、京女郎。

〔八〕

『鴛鴦の雌雄の

濡れ翼、

忍び夫さゑ、

なきものを、

焼野雉子の、

子も持たぬ、』

まごろむ夢に

秋たけて、

風吹き萎る、

女郎花。

一人寝る夜の、

手枕ぞ。

心はやすし。

を、東男。

〔九〕

捨つも憂かりき、

捨てられて、

彌惜まれぬ。

仇花を、

手折らまじもの、

浮かれ男の、

あゝ盡きじ世に。

袖ふりて、

捨てられき我、

汝を捨てめ、

沖の小島の、

離れ岩。

仇浪高し。

を、京女郎。

[10]

朽木の舟、

囚とられの、

花はなのなつかげ俤、

汐しほたれぬ。

海あま女まのかろも荇藻の、

亂みだれがみ髪、

怨うらみにう迂ねる、

蛇くちなりの、

罽ろ綱づな纏まとひて、

狂くるひは這はふ、

潮うしほ咽なげびぬ、

沖をき千ち鳥さり。

血ちに啼なきて。

を、東あづま男を。

〔一一〕

汐路の夕陽

紫の、

波より暮れぬ。

漁火の、

影か不知火、

燃ゆる胸。

離れ小島に、

舟招く、

枯れ穂の薄、

啜り泣く、

捨てられ草の、

女郎花。

思ひしるかも。

を、京女郎

〔一二〕

漕ぎ離れぬる、

朽木舟。

叫號はきゝぬ。

『憂き人よ、

怨みに亂る、

黒髪は、

蓬に繁る、

玉藻草、

纏ひ纏ひて、

舟やらじ』

潮搔き騒ぎ、

渦揺らく。

藻草の繁り。

を、東男。

〔一三〕

戦ぎの藻草、

舟を逐ふ、

あゝ身の果、

うたかたの、

怨みは消るぬ。

『玉藻こそ、

情なき君の、

亂れ髪、

纏ふは戀の

小夜衣こよろも』

人影消ひごかげるて、

月白つきじらみ。

黒くろき朽舟くちぶね。

を、東男あづまを。

誰待鐘

〔一の一〕

眞菅ますげの小笠こがさ

破やぶれぬれば

雨あめそほ浸ひたる

濡ぬれ髪かみに

小夜衣こよひころも

人影消ひとかげゑて

月白つきしろみ

黒くろき朽舟くちふね

を、東男あづまおとこ

誰待鐘

〔一の一〕

眞ま菅すげの小を笠がさ

破やれぬれば

雨あめそぼ浸ひたる

濡ぬれ髪かみに

櫛しも通かまはじ

結むすぼれの

胸むねの綾あや絲いと

を、誰たれ偲しのぶ

淺あさ茅ち道みち

涙なみだ時し雨ぐるゝ

〔IのII〕

草くさなひ鞋むか

紐ひも朽くちて

傷いための戦そよぎ

萱かや瓣なまる

袖牽く茨

肌膚裂けて

鮮血彩る

を、誰をかも

憧れの

風の咽び

〔III〕

緋りの杖は

新月の

撓みの眞弓

木隠れの

白衣びやくしほれて

鈴すずの音ねの

袖そでに振ふるふ

をく誰たれさしも

白露しらつゆの

乾ひぬ問まの情なさけ

【一の四】

雨あめを厭いとひの

笠かさならば

紐ひもや解とかまし

風かぜ吹ふかば

翳かげしの袖そでに

人ひと目めせく

褪あせせし口くち紅べに

を、誰たれ慕したふ

手た枕まくらの

旅たびの簍やうれ

【一の五】

辻つじ建たつ栞しほり

文い字じ荒あ撫いて

壊こはれの祠ほくら

神かみ在まさず

囁く落葉ささやく

誘惑ふ魔のささ

迷ひの小路まよひ

を、誰ぞ來ませたれ

行暮てゆきぐれ

問わま欲し道と

傾け笠のかたむ

片びさしかた

月もさゝじなつき

夕顔のゆゑん

[一の六]

白^{しろ}む面^{おも}影^{かげ}

病^{びやく}葉^{えつ}の

翻^{かへ}りて覗^{のぞ}く

を、誰^{たれ}にだも

忍^{しの}ぶれご

色^{いろ}に灰^ほめく

[一の七]

いぶせき裾^{すそ}裳^も

土^{つち}の香^かに

色^{いろ}も雫^{しづく}も

粗^{あら}布^ぬを

卯の花垣うまのはながきこ

蝶よ見てふよみて

頼むは指道たのむはしるべ

をく誰そや住たむ

私語さごの

笕滴垂かほしたる

*

*

*

[11の1]

蜘蛛くまの糸いと

落椎おちいの

念珠ねんじゆ懸かけ綴つづる

癡寺ちてらに

鐘かねの樓たかご

傾かたむきて

鬼おに蔦つた攀よづる

をを誰たれを待まつ

時ときの鐘かね

御み堂どう守もり撞つく

[11の11]

崩くづれの岩いわ根ね

爪つま立だちて

萍うきくさ繁さしみ

濁にご水みづ

うつろふ姿すがた

肉塊しんがたの

血ち煮にゑて狂くるふ

をた誰たれぞごも

知らじもの 慕したひて泣なく

【二の三】

惱なやみに窶やつる

たそがれの

鐘かねや怨うらみ

撞つかじごも

遣る瀬は有らじ

撞かばやな

竭せじ涙

をく誰をしぞ

怨み詫び

響は濡める

〔四〕

忘れ難なや

姫百合の

月映す面

袖白み

音をこそ仰げ

夕靄に

乙女佇む

をく誰が袂

燻り香の

薔薇の戦ぎ

[二の五]

朽木の柱

痩せ細そる

腕に抱きて

遠郷を

眺望のぞむ名残なごりや

床ゆかし人ひと

蓬あふ瀬せの頼たのみ

をを誰たれ怨うらむ

憂うき鐘かねの

送おくりき行衛ゆくゑ

憂うきは曉あかつき

仇あだに撞つかじ

亂みだれ心こころに

屈かむ指さして

〔二の六〕

夕暮六つの

鐘をのみ

里へ送る

を誰が耳に

通るごと

撞木に縫る

〔二七〕

法衣纏ひの

火車に

呪祖の唸き

念珠断れて

「君きみいゝささずや
 語かたらひも
 山くら梔なしの花はな
 根ねや朽くちし

〔三の二〕

あゝ胸むね焦こる
 血ちの池いけに
 墜おちちてぞ消けさむ
 をゝ誰たれも無なき

山やま寺でらの

鐘かねは響ひびかじ

*

*

*

情け白露なさしろつゆ
 いふ花はなの
 朝あしたも待またじ
 笠かさ脱ぬぎて

【三の二】

妾わらは來きぬるに
 戀こひしくば
 なご鐘かね撞つかぬ』
 をく誰たれ沈しづむ

池水いけみづに

冷ひやたき永なが眠ね

背後うなじ仰あふげば

鐘かね黒くろみ

宵よ月つき淡あわし

をを誰たが姿すがた

待まち詫わびて

靈たま火び燃もゆる

罪つみの深み池いけの

測はかり得えじ

杖つゑこそ捨すてめ

渦うず廻めぐる

【三の三】

血潮ちしほの淀みよどみ

浮うかび葉はの

臺うてな破やれぬる

をを誰たが骸むくろ

絡から捲まきて

繁しげる水みづ草ぐさ

「靈みたま在まさば

幻まほろしを

單こめよ狹さ霧ぎりの

むら立たてば

【三の四】

懐かしものを

なご鳴らぬ

思ひ出の鐘』

をく誰住まじ

癡寺に

招きの薄

聲のみ明瞭

茅蝸は

彼の人叫ぶ

咽びの音

〔三の五〕

鳴けよ暮せよ

憧れの

空蟬衣

をく誰が手にぞ

つゞれ刺す

遺しの筐

【三の六】

鈎綱揺ぐ

聲籠る

鐘に影添ふ

佛の

青^{あほ}き火^ひ燃^もゑて

灰^ほめきの

浮^うかみの響^{ひびき}

を^を誰^たが情^{なさけ}

焦^{こが}れ火^ひの

散^{ちり}々^{ちり}消^きゆる

花
紫

戀^{こひ}秘^ひめて

面^{おも}はゆや

忍^{しの}び衣^えの

袖^{そで}のかけ

紐^{ひも}がる手^て解^ときて

青^{あは}き火^ひ燃^もる^ゑて

灰^ほめ^きの

浮^うか^みの響^{ひび}

を^を誰^たが情^{なさけ}

焦^これ^火の

散^ち々^々消^けゆ^る

花
紫

戀^こ秘^ひめて

面^{おも}は^ゆや

忍^{しの}び^衣の

袖^{そで}の^かげ

紐^{ひも}が^る手^て解^とき^て

亂れ髪みだりかみ

惜しや梳げぬをしやかみ

移ろはゞうつろは

影をも捨てめかげをもすて

胸そゞろむねそ

水の姿見みづのすがたみ

色褪せそいろあせ

をく姫が——織る機はをくひめが——おりはた

慕ひの箴したひのな

戀の色糸こひのいろいと

裁ちて——重ねて——綴りぬるたちて——かさねて——つづ

其藤衣そのふじころも 紫袴むらさきはかま

1183

明治四十三年八月九日印刷
明治四十三年九月十日發行



塔影奧付

金壹圓

著者 瓜生 綠川

岡山縣岡山市弓之町百六十六番地

發行人 辻 助三郎

岡山縣岡山市丸龜町六十四番地

發行所 岡陽館活版部

岡山縣岡山市丸龜町六十四番地

瓜生緑川著

詩集

さばれ波

近刊

瓜生綠川作
小説
室町御所

近刊

瓜生綠川著
佛敎
小説
鼓ヶ淵

近刊